

教科そのものの魅力で 主体的な学びに 生徒を導く

2009年度から始まった中学校での新課程先行実施の中で学習をしてきた生徒が2012年4月に高校1年生となった。この1年生を対象としたスタディーサポートの結果では家庭学習時間が増加している一方で、主体的な学習姿勢が弱まっている傾向が見られた。こうした傾向を踏まえて、今後、どのような指導が求められるのか3人の先生方に聞いた。

中学時代の 家庭学習時間は増加

2012年4月に1年生を対象に行ったスタディーサポートの結果では、中学校時代の家庭学習時間が平日・休日共にやや増えているという傾向が見られました。新課程の影響を受けた生徒の学習態度や意識に変化は見られるのでしょうか。先生方はどのような実感をお持ちですか。

挽地 本校のスタディーサポートの結果を見ると、確かに例年に比べて中学校時代の家庭学習時間は増えており、高校入学時の学力も成績上位層が増えています。生徒は授業でしっかり前を向いて教師の話聞いており、学習にきちんと取り組む姿勢が身に付いていると感じます。

しかし、生徒が自ら進んで学習に取り組んでいるのかというと、必ずしもそうではありません。本校は、平日も休日も相当量の課題を出して学習習慣を定着させるという指導で生徒を引っ張ってきました。生徒は与えられた課題に前

向きに取り組んでいるものの、自分で何が必要かを考えて勉強している段階ではありません。主体的な学習姿勢を育むためにも、教師が1歩引いた指導にしたいのですが、手を掛けるのをやめてしまうと生徒の学習量は途端に減りそうで、指導の切り替えになかなか踏み切れないというのが現状です。

一ノ瀬 新課程では中学校の学習内容が増えているので、家庭学習時間も増えているのだと思います。本校の併設中学校でも家庭学習時間は増えているようですが、高校では大きな違いはありません。私が生徒の変化として感じているのは、よく質問しに来るようになったことです。これは学習意欲が高くなったというよりも、個別指導を行う塾の影響があるのではないかと考えています。一斉指導の授業で問題を解決しようとするのではなく、自分に合うように個別に指導してほしいという意識が強いのではないのでしょうか。

榎本 生徒が学習の良いきっかけを求めていることは、私も感じています。本校は長年、生徒の自主

性を尊ぶ指導方針を取ってきたが、最近では学習時間も少なく、伸び悩む生徒が増えました。そこで、生徒の自主の心に火を付けようと、「大学入試レベルと現時点での実力との差」を率直に伝え、「結果にこだわらず、全力を尽くそう」と呼び掛けました。すると、教師の協力で新たに増設した補習にも予想以上の生徒が参加し、更に自ら朝早く登校し学習に取り組むなど、きっかけを生かし、進学の成果も大きく伸ばしました。

挽地 生徒は基本的に真面目で素直であり、教師の指導に応えてくれます。しかし、受け身の学習態度のままでは本当の力は付きませ



宮城県仙台南高校

挽地裕之 ひきち・ひろゆき

教職歴28年。宮城県仙台南第三高校などを経て、同校赴任6年目。主幹教諭。進路指導主事。国語科。

ん。大学受験、更には社会に出てからのことを考えると、学習を自分で考えて組み立て遂行していく力が必要です。自身の反省でもありますが、高校時代からそうした力を育てていかなければならないと思います。

**教師の質問を絞り
生徒が考える時間を増やす**

——生徒の主体性を引き出すために、どのような指導の工夫が考えられるでしょうか。

挽地 最初は教師の仕掛けが必要だと思えます。教師がお膳立てをしつつも、生徒が自分たちで取り組んだように思わせ、自信を持た



愛知県立名古屋西高校

榎本郁二 ますもと・ゆうじ

教職歴31年。愛知県立五条高校などを経て、同校赴任3年目。進路指導主任。数学科。

せる。そうした自信の積み重ねによって生徒は独り立ちし、主体性を持つようになるのではないのでしょうか。

一ノ瀬 私の高校時代の恩師は、「分かる」と出来るは違う」とよく言っていました。単語や公式などを理解していたとしても、問題でそれを使いこなせるかどうかは違います。これと同じように、教師になって思うのは「教える」と定着させるは違う」ということです。授業で説明するだけでは、教えることはしていても、定着はしません。授業の中にあえてつまずくポイントを入れておき、授業が終わる頃には出来るようにする。こう



長崎県立長崎東中学・高校

一ノ瀬憲二 いちのせ・けんじ

教職歴21年。長崎県立佐世保北高校などを経て、同校赴任3年目。進路指導部主任。英語科。

した達成感や定着度を高めます。達成感が生徒の自信になり、次の学びへの意欲につながっていくと考えます。

——具体的にはどんな方法があるのでしょうか。

一ノ瀬 本校では、希望者のみとなりますが、ハウステンボスとカナダのバンクーバーで語学研修を行います。いずれの研修でも、生徒は英語力のなさを痛感させられることになるのですが、英語が通じなかった、聞き取れなかったと諦めてしまうのではなく、その悔しさをバネに英語学習を頑張り始めます。そうした姿を見て、本物との出合いが生徒の意欲を高める機会になることを実感しました。

先日、英語の授業でアメリカのオバマ大統領の核廃絶に向けた演説をCDで流しました。事前に生徒には「核兵器に関連して使われている単語に注意して聞いてください」と伝えました。500語に短縮された演説を聞いた後、生徒に「どういう単語を使っていたか」と質問すると「nuclear power」と一斉に答えが返ってきました。

生徒はオバマ大統領の肉声に触れ、それを聞き取れたことに感動していたようです。面白い授業だったと、私に言ってきました。

教材と関連した「本物」を提示することで、授業が活性化し、生徒の知的好奇心を刺激することが出来ます。小さなことですが、その積み重ねが生徒に大きな変化をもたらすのではないかと思います。

挽地 教師は教えることが好きです。準備したことを授業ですべて伝えようとしがちです。しかし、それでは生徒に考える余地はありません。私は「全てを教え切る」という意識を変え、ポイントを絞った授業にする必要があるのではないかと考えています。

例えば、古文で文章を一つひとつ解説するのではなく、「1回の授業につき発問は3つまで」と決めて授業を組み立てるのです。教師の説明が減れば、それだけ生徒が考える時間が増えます。発問を絞ることが、この教材を通して最も教えたいたことは何かを改めて見つめ直す機会となり、結果的にその物語の本質に迫る指導が出来る

ようになるのではないのでしょうか。

理解が曖昧なままでも放っておく生徒たち

——お二人の話は、教科の魅力に触れさせる、伝えるという点で共通していると思います。

柘本 「学ぶ」とは、未知のことが分かるようになり、出来ることが増えていくという、自分の世界が広がる自然で楽しい行為です。数学では、成績とは別に、「簡単に納得しない」生徒ほど可能性を持っていると思います。「もつとすつきりしたい」と悩みながら、貪欲に真理を求めていきます。この繰り返しこそが自分のものさしをつくり、新たな興味を生みます。一方、数学を単なる知識と捉えている生徒にとつては、楽に解法を得ることが重要であり、新たな分野は「また大変なことが増える」負担でしかありません。教科の本質的な魅力を伝え、こうした姿勢から脱却させなければ主体的に学ぶことなど出来ないでしょう。

——スタディーサポートの学習姿勢の調査では、「習ったことは曖昧

なままにせず正確に覚える」「納得するまで問題に取り組み解法を理解する」ことに、「まったくあてはまらない」と回答した生徒が前年度よりも増えていました(図)。

一ノ瀬 新課程で中学校の学習内容が増えたことに対応するため、とにかく前に進まなければならず、生徒は理解が曖昧でもそのままにしておいているのかもしれない。家庭学習時間が増えたとしても、分からないことを放っておいて学習を進めているとしたら、自ら学びに向かう姿勢は失われてしまうでしょう。高校でも

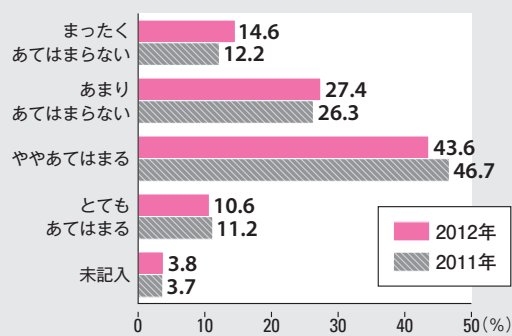
新課程で学習内容が増えるため、データで示された点は生徒の学習定着を図る上で大きな課題と捉えるべきです。

本校ではスパイラル指導を取っており、一通り単元が終わった前に戻ってもらう1度取り組むという反復をしています。しかし、教師の中には、進度を遅くして定着を優先させた方がよいという考え方もあります。生徒の様子を見て、教師間の目線合わせを改めてする必要があらうと思われました。

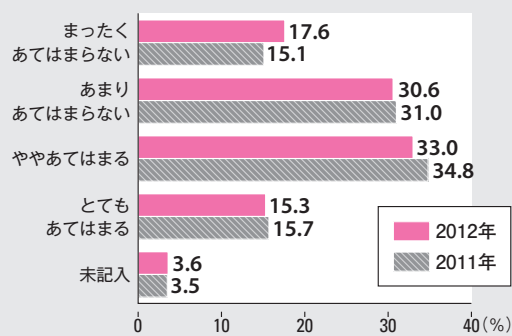
柘本 学びはそれ自体に価値があるものですが、その喜びを知らず、

図 1年生の教科学習の姿勢について

◎習ったことは曖昧なままにせず正確に覚える



◎納得するまで問題に取り組み解法を理解する



出典/ベネッセコーポレーション スタディーサポート 2012年1年生1回(4月実施)「学習状況リサーチ」



何らかの手段と捉えているから「これぐらいでいいだろう」「理解は必要がない」となるのです。挽地先生がお話しされたように、今の生徒は素直で真面目で、教師の指導をよく受け入れてくれます。素直さは、自分の考えを持たず、与えられた形のまま吸収してしまう怖い側面も持っていますが、その素

直さを「純粋な素養」という観点で指導を工夫すれば、教科本来の魅力が敏感に伝わり、主体的な学びの起点となると考えます。

教師自身も 主体的に学ぶことが必要

——教科の魅力、学びの面白さを生徒に伝えることは、先生個々の力量が問われることだと思います。

榎本 教科の魅力や学びの面白さとは何か、答えは簡単に出ません。ただ、教育はあくまでも人間相手。私は対面する子どもたちの中に答えを求め、授業をつくってきました。生徒にテーマを与え、考えさせ、その反応から授業を展開していきます。間違った答えも取り上げ、その矛盾に皆が気付くことに授業全体を使うこともありえます。試行錯誤の中、生徒たちの眠っていた探求心が授業を導いてくれます。

授業は生きものです。子ども自身が授業をつくるという視点も、今回の新課程のねらいと重なるのではないのでしょうか。

挽地 私は、教師同士が教科指導

について深く話し、いろいろな指導観や指導法を学び合えればいいと思います。例えば、今度の新課程で、国語は小・中・高で学習内容が系統化され、学校教育の中で高校の国語科教育の位置付けが明確になりました。いつもは変更点ばかりに目が行ってしまいました。が、今回は教科内で改めて学習指導要領を読み、高校の指導で求められていることは何か、目線合わせをしたいと考えています。

一ノ瀬 生徒に主体的に学べというだけでなく、教師も自ら学習し、そうした姿勢を生徒に見せていくことが必要でしょう。教育委員会主催の研修だけに頼らず、自発的に学ぶことに意味があると思いい、私は自校以外の先生方と勉強会を開いています。

挽地 教科が異なっても、同じ土俵で話し合えると思います。国語は技能教科です。内容教科だと思っている人が多いようですが、日本語を読み書き、聞き話せるようにするのが国語科教育の目的で、学習指導要領にも明確に記されています。ですから、同じ技能教

科である英語や体育の先生と「技能を身に付けさせるにはどうすればよいか」というテーマで、教科を超えて話せると思います。

更に、新課程では小・中・高で共通して「コミュニケーション能力」などの育成が強調されており、学校種を超えて話し合う土台もあります。このチャンス逃さずに、「自ら学ぶ力の育成」と対峙しなければならぬと思います。

榎本 今の子どもたちは、小さい頃から、先生や保護者など他人の答えと合致することでマルをもらうという経験に偏り、「自分が納得する」ことを大切にしてきていない。だから、拠って立つところがなく、結果として自信のなさにつながっているのだと感じます。

「正しいことをすれば正しいことに至る」。これは私が生徒に伝え続けている言葉ですが、「自分が良いと思う、納得することが大切」という価値観を、幼少期から高校・大学と連続性を持って育てていくことが「主体的な学び」を生む力として、今こそ必要だと強く感じます。